異世界の運び屋

あっぷっぷ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界の運び屋

【Ｎコード】
Ｎ７８０８Ｖ

【作者名】
あっぷっぷ

【あらすじ】
佐藤　太郎は異世界に迷い込み１人の少女と出会う。
様々な勢力が牽制し合い表向きの平和を演出する混沌の街＜苦楽＞で少女と青年は今日を生きていく。

英雄

＞ミーン　ミーン　ミーン＜

気の滅入る暑さとセミの鳴き声
汗を拭いながら神社の裏に在る林を歩く。
子供の時の記憶だと裏の林は本当に小さく、入って直ぐに林の向こうの商店街が見えた筈なのだが。

「商店街に行くならコッチの方が　絶対近いと思ったんだがな～・・・」

少し不安になって独り言を呟いた時、林の切れ目が見えた。
思わず足早になり林の外に私は、駆ける様にして出たのだった。

しかし、林の外に出た私を迎えたのは見知った商店街では無かった。

「なんだココは・・・？」

私は周囲を見渡して呆然としてしまった。何処だココ？再度、周囲を確認して整理してみる。

林を抜けて出た所は大きな道。舗装もされず剥き出しの大地で、それが左右に果てしなく続いている。
果てし無いと言うのは少し言い過ぎかもしれない。右の道はかなり遠くでは在るが壁の様な物にぶつかっている。左の道は遠くの山に

続いている。
正面は平野が続き、遠くには山が見える。で、最後に元来た林だけど、後ろを見たら見知らぬ森でした・・・なにコレ？

〈ミーン　ミーン　ミーン〉

後ろの森からセミの声が聞こえる。
空を見上げると太陽はまだ高く昼の頃合だと時間を知らせる。

〈ぎゅるる～〉

腹が減った・・・　元々昼飯が食べたくて商店街への道を急いだのだ。
呆然としていても始まらない。まずはココが何処なのか確認しなくては
周囲を再度見渡し誰か人は居ないか？と目を凝らす。すると山に続く道に馬を引いた一人の人影が見えた。
かなりの距離が在るが人影に向かって私は歩いた。人影はこちらに向かっているのだから、待っても良いのだが不安だったのだ。

いくらか距離が詰まり、向こうの人影が少女と荷物を積んだ小さな馬なのだと確認できた時、左側の森から3人の男が飛び出してきた。

「よう　兄ちゃん？　着てる服とポッケの中身を置いてきな　序に命もだ」
「運が無かったな　ボウズ　次の嬢ちゃんが待てるからな　手早く済まさせて貰うぜ？」

そう先頭の二人が声を掛け、薄ら笑いを浮かべつつ腰から長い刃物を引き抜いた。

剣？ちょ？嘘だろ？　日本でそんな物を持ち歩けるわけ無い。そう思いつつも鈍い灰色を基調に所々に赤錆を付けた刀身に、私は本能的な恐怖を覚えた。
一人がその鈍い光を放つ剣を振り上げ襲ってくる。私は全力で後方に飛びのく様にその剣を避け・・・ころげ

「ひ・・ヒィィィィ！？　あァ　あワぁ？　あ　ぁ　ぁあああ！？」

情け無い声を上げながら四つん這いで、這う様にして男達から距離を取った。

「ちっ　逃げんな糞ガキ！　大人しく死にやがれ！」
「おいおい　熱くなって着てる服を汚すなよ？　上は良いが下は高く売れそうだからな」
「解ってんよ　いちぃ＞ガシュ！＜」
「あ！？」
＞ドタ・・・ガシュ！・・・ズサァ＜
「なぁ！？　テメー！　何しやがる！　ぶっ殺すぞ！　アマ！」

男達から四つん這いの状態のまま逃げていたら、突然何かが男達に刺さり2人の男が倒れた。
何かが飛んできた方を向くとショートカットの少女が、鋭い笑みを浮かべて男に向かい声を掛けた。

「ヘイヘイヘイ　ぶっ殺す？　そいつは上等なジョークだよ旦那？
てめーらが最近ココらを荒らしてる馬鹿野郎かい？」
「小娘が調子に乗ってんじゃねーぞ？　不意を付いて2人殺ったのはほめてやるがな　正面からこのオレと殺り合って勝てるとでも思ってんのか？　アァ！？」

「勿論だよ旦那　それにお前らの首には良い値が付いててね　トンだボーナスだよ？　逃す手は無いさ」

そう言って少女は一気に男に向かって飛び掛った！
男は剣を正面に構え、飛び込んでくる少女を向かえる。
飛び掛る少女に合わせる様に男は踏み込み、少女の胸元を一突きに・・・！？
少女は小さなナイフを剣の腹に添わす様に突きの軌道を逸らした、同時に体を捻る様に突きを交わし男の懐に入る。
突かれる刹那、男の懐に潜り込んだ少女は男の首元をナイフで薙ぐと、フワリと男から離れ、そして男は斃れた。

まるで物語に出てくる、民のピンチに駆けつける”英雄”の様な少女に、何か芝居でも見ていた様な現実感の無さに、私は先程まで恐怖で震えて居たのも忘れ歓喜したのだった。

出会い

私は、ただ少女を見ていた。
３人の男に襲われ、命の危機に陥った私を助けてくれた少女
その少女が、腰を抜かし座り込む私の元に歩いてきた。
そして私の目の前にサッと右手を差し出す。私は縁量無くその手を握り

「ありがとう」

っと、答えて腰を上げたのだ。
すると少女は何故か苦虫を噛んだ様な顔をした後に、こう答えた。

「違うだろ？　何で握手なんだよ？　金だよ！金！　マニー！」

私は、意味が解らず情け無い声で答えた。

「は？　えぇぇぇぇ！？」

「オイオイ？　オレはアンタの命の恩人さ？　人に助けて貰った時はお礼をしなさいってママに習わなかったか？　んん？」

「あ　いや　お礼　お礼ですか？　えっと　余り手持ちが無いんですけど・・・」

そう言って私はズボンのポケットから、財布を出して中身を見せた。

「は～？　なんだアンタ？　この紙切れがお礼？　便所紙にもなら

ねーよ　こんなモン　ってか持ってるのはコレだけか？」

「ええ・・・　お昼を食べようと出てきただけですから・・・　って　え？　日本円が使えないの？　えぇぇ？」

「あ～？　アンタが持ってるコノ紙切れがお金って言うなら　これはココらじゃ使えないね　要するにアンタは無一文さ」

「な！？　ココって何処なんですか？　え？　なんで？」

「ヘイヘイヘイ　落ち着きなって兄ちゃん　訳在りなんてココらじゃそう珍しくも無い　少し落ち着いて事情を話してみなって？」

そして私は少女に事情を話し、少女から答えを貰った。
ココは、神州国の南端で日本なんて国は無いらしい。清清しいまでに異世界だった・・・

「兄ちゃん　辛いの解らなく無いが何時までそうしてる気だい？
とりあえず礼の金も無いんならオレを手伝いな」

いつの間にか荷馬を連れ戻った少女の言葉に、顔を上げて言われるままに手伝いを申し出た。
悩んでても仕方が無いなら、何かをやって気を紛らわしたかったのだ。

「おう　オレはコイツらの荷物を漁るから　アンタはこの袋に死体を突っ込んでくれ」

「は？　え？　いや　え？　死体を・・・？」

「当ったり前だろ？　死体持ってかねーと賞金でねーだろ？　金がねーならそん位働けよ！」

「はい！？」

うぁ・・・　勢いに任せて返事をしたが、死体を袋に詰めるのは勘弁していただきたい・・・

しかし、これ以上怒らすの怖いので仕方が無く、嫌々死体を指で詰まんで死体袋に・・・？

何で指で詰まんで死体が動かせれるんだ？　如何考えても無理だろ？　妙に死体が軽い。

残りの2体も襟首を詰まんで袋にポイポイっと上半身を突っ込み、袋の入り口を持ち上げて軽くゆすって中へ入れる。

そこで私は理解した。なんだ！夢だ！っと。

夢だと安心し、上機嫌で死体袋の口をキュっと閉めた。

「なんだ？　思ったより力在んだな　そうだアンタ　無一文だしやる事も無いんだろ？」

「え？　まー　そうですけど？」

「なら付いて来な　これも縁さ　私が死体袋1つ　アンタが2つで向こうに見える城壁まで運ぶ　ＯＫ？」

「え　ええ　解りました」

そう言って2人と馬1匹で歩き出したのだが・・・

妙に軽い死体袋2つをズルズル引こ摺りながら隣を見る。

死体袋と荷馬を相手に格闘する少女・・・

小柄な少女には、成人男性が入った死体袋は重く、荷馬の誘導もと

成ると難しいらしい。

「あの・・・　良ければ　その死体袋も持ちますよ？」

「マジか？　悪いな～　アンタそんだけ力が在りゃ仕事出来るぜ？
オレと組むか？」

袋の背負い紐をこちらに寄越しながら、少女は上機嫌でそんな事を言い出した。
私が居なかったら死体袋３つ、どうやって運ぶ気だったのだろうか・・・？
下手に聞くと怒りそうなので聞きはしないが・・・

「目が覚めるまでやる事もないですし　お世話に成りますか」

そう私が答えると

「あ？　目が覚めるまで？」

と少女は首を傾げたが、その後は私がこの世界に付いて質問し少女が面倒そうに答える、と言った感じ街まで歩いた。

混沌の街　苦楽

死体袋を3つ引き摺り城壁の前までやってきた。
壁は中々の迫力で3階建てのビル程の高さの城壁が、海側を除きコの字に街を囲んでいるのだそうだ。
正面の門に近づくと衛兵らしい男が声を掛けてきた。

「おい　そこの男　通行証を」

「え？　通行証ですか？　いや　持ってませんが・・・」

「無いなら　こっちだ　名前を書いて　通行証の発行に銀貨1枚だ」

「その　お金は持って無くて・・・」

「ヘイヘイ　ジョル　そいつはオレの連れだ　今回は見逃してくれよ？」

「それは駄目だレイ　これも私達の仕事でね　それを曲げちゃ他の方々に申し訳が立たない」

「ったく　ついてね～！　なんで堅物ジョルの当番の日なんだＹＯ？　あー！　糞！　ほれ！　銀貨だ　これで良いだろ！　糞！」

「良い子だレイ　おい　若いの　こっちで名前を書いてくれ　直ぐ用意しよう」

一気に不機嫌に成った少女に、銀貨を出して貰った礼を言って衛兵の後に続いた。

少女の名前は　レイ　と言うらしい。
そう言えばまだ名前を言って無かったと、今更の様に気づいた。
案内された受付で、名前を　佐藤　太郎　と書き住所等を如何した様かと悩んだ。

「若いの　住所が無いならこの街で住所が決まった後に書きに来たんで良いぞ　この街に住まないなら元々必要ないしな」

っと、言われたの名前以外白紙で出し難なく通行証を貰う事が出来た。

「おっせー！　早くしろよ？」

っと不機嫌な少女に、謝り自己紹介を済ませる事にした。

「遅く成って申し訳在りません　私は　佐藤　太郎　と言います
よろしく」

そう言うと少女は、少し驚いた顔をして

「レイだ　オレの事はレイで良い　行くぞ　タロ　グズグズすんなよ！」

とだけ言うとレイは、そのまま街の中に向かって歩を進め始めた。
そして門から続く街のメイン通りを暫く歩くと、大きな石作りの建物の前でレイが止まった。

「タロ　入るよ　ここが苦楽の街の冒険者ギルドさ　ようこそ　混沌の街　苦楽へ」

そう言ってレイは、意地の悪そうな笑みをニヤリっと浮かべて冒険者ギルドの建物の中に入っていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7808v/

異世界の運び屋

2011年10月9日13時14分発行